

栗東市埋蔵文化財調査報告

2003年度 年報Ⅱ

—安養寺遺跡（新開3・5～7号墳）—



2005.3

栗東市教育委員会
(財)栗東市文化体育振興事業団

栗東市埋蔵文化財調査報告

2003年度 年報Ⅱ

—安養寺遺跡（新開3・5～7号墳）—

2005.3

栗東市教育委員会
(財)栗東市文化体育振興事業団



安養寺遺跡全景



新開3号墳出土遺物

例 言

1. 本書は、2003（平成15）年度に栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団が実施した安養寺遺跡の発掘調査報告である。安養寺遺跡調査区内において周知されていた円墳を新開3号墳として、新たに確認された古墳を新開5～7号墳として報告する。
2. 本書の刊行は「栗東市埋蔵文化財発掘調査2003年度年報」を補足するものである。
3. 現地発掘調査は滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東市教育委員会を主体として財団法人栗東市文化体育振興事業団が実施した。試掘調査、測量調査は栗東市教育委員会が行った。
4. 調査の実施にあたっては拓和建设株式会社・松屋建設株式会社のご協力を得た。
5. 本書の編集・執筆は雨森智美が行った。
6. 調査の体制は、以下の通りである。

栗東市教育委員会	生涯学習課	課 長	田中 静江
	文化財保護係	係 長	清水 好洋
		副 係 長	松村 浩
		主 事	島田 浩美
財団法人栗東市文化体育振興事業団			
	文化財センター	センター長	平尾 眞弘
		係 長	近藤 広
		主 査	雨森 智美
7. 現地調査および報告書作成にあたり、以下のかたがたのご教示を得た。（敬称略）

宇野 茂樹 小笠原好彦 河内 一浩 寺沢 薫 辻川 哲朗 中井 一夫
中川 正人 西田 弘 橋本 輝彦 原田 三壽 森下 章司
8. 現地調査および整理作業にあたり、以下のかたがたの御協力を得た。（敬称略）

調 査 員 畑本 陽子 森 智美
整 理 員 奥村美枝子 岩根 隆子 木村三津子 穴戸 貴子 宮嶋八重美 南出 彩子
調査補助員 青木タキ子 上田 和江 大岡 道代 教野 妙子 辻井一二美 石原 恵子
中井 好子 井上 良子 千代 清美 澤田八千代 大島 洋巳 井上 恵子
井上 妙子 木下 政子 久徳 良子 竹村ヒロ子 堀部アキ子 谷口由香里
薬師川 恵 梅野 和生 植原喜美代 大継 秀蔵 柴原 慶子 富高 幸栄
福井 睦
9. 遺構写真撮影は松村浩、雨森が行った。遺物写真撮影は一部（巻頭カラー図版、図版9-23）を寿福写真房が、そのほかを雨森が行った。
10. 図面に使用した方位は磁北である。
11. 本書で使用した標高はTP（東京湾平均海面高度）である。

目 次

巻頭カラー図版

例 言

目 次	1
第1章 調査の経緯	3
1 調査の経緯	3
2 調査日誌抄	4
第2章 位置と環境	5
第3章 調査の概要	8
1 調査前の状況	8
2 検出遺構および出土遺物	9
(1) 新開3号墳	
(2) 新開5号墳	
(3) 新開6号墳	
(4) 新開7号墳	
(5) 土壌墓	
(6) その他	
第4章 小結	26
図 版	30

挿図目次

第1図 調査地位置図	p-3
第2図 表土除去作業	p-3
第3図 作業風景	p-3
第4図 現地説明会	p-4
第5図 高所作業車より撮影	p-4
第6図 断面はぎ取り作業	p-4
第7図 新開4号墳出土船形埴輪	p-6
第8図 周辺遺跡分布図	p-7
第9図 調査前の状況(新開3号墳)	p-8
第10図 掘削前の測量図	p-8
第11図 安養寺遺跡遺構図	p-10
第12図 新開3号墳墳丘断面図	p-11、12
第13図 新開3号墳主体部実測図	p-13
第14図 新開3号墳主体部鏡および木片出土状況	p-14

第15図	新開3号墳金属製品等出土地点	p-14
第16図	古墳築造以前の遺物	p-15
第17図	新開3号墳出土土器実測図	p-16
第18図	新開3号墳出土金属製品および木片実測図	p-17
第19図	新開5号墳出土遺物	p-19
第20図	新開5号墳崩落土土層図	p-19
第21図	新開5号墳測量図および盛り土断面図	p-20
第22図	新開6号墳および出土遺物実測図	p-21
第23図	新開7号墳実測図	p-22
第24図	土壇墓実測図	p-22
第25図	土壇墓出土遺物	p-23
第26図	P-1実測図	p-23
第27図	P-1出土遺物	p-23
第28図	包含層出土遺物	p-23
第29図	古墳周辺土壇出土陶磁器	p-24
第30図	採掘坑検出状況	p-24
第31図	採掘坑略図	p-24
第32図	新開3・5号墳盛り土状況図	p-27
第33図	新開古墳群主体部実測図	p-28
第34図	新開古墳群全体図	p-29
第35図	安養寺古墳群全体図	p-29

表目次

表1	振文鏡、赤彩木片蛍光x線分析データ	p-18
----	-------------------	------

写真図版目次

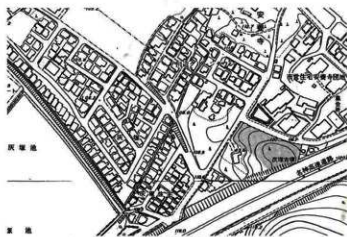
図版1	安養寺遺跡全景	p-30
図版2	新開3号墳鏡出土状況	p-31
図版3	新開3号墳主体部および遺物出土状況	p-32
図版4	新開3号墳盛土・崩落土土層	p-33
図版5	新開5・6号墳	p-34
図版6	新開7号墳・土壇墓	p-35
図版7	安養寺遺跡出土埴輪	p-36
図版8	安養寺遺跡出土土器	p-37
図版9	安養寺遺跡出土金属・石・木製品	p-38

第1章 調査の経緯

1. 調査の経緯

調査地は従来より古墳として認識され山林として残されていた場所であった。東側には名神高速道路が隣接し、昭和35年の建設工事の際には滋賀県教育委員会によって発掘調査が行われた。今回の調査地と同一丘陵上につながる新開1・2号墳では武具・馬具・裝飾品等の遺物が多量に発見され、一括して国の重要文化財になっている。西側に隣接する新開西古墳群では平成14年度に発掘調査が実施された。

今回の調査は宅地造成にともなう開発により実施されることになった。調査に先立ち業者による樹木の伐開後、平成15年6月5日から国庫補助事業により予備調査として測量調査・墳丘試掘調査を実施した。6月9日からは本調査に着手し、3・5号墳の表土を手作業で掘削し始めた。ほどなく赤褐色土が現れ、鉄剣2振が出土。2点とも切先をN-60°-Eに向けた状態で出土したので、ほぼ床面まで露出しているものと考えられた。墳丘の精査と平行して7~8月には墳丘外の平坦面を検出し、測量調査を実施した。8月には主体部から銅文鏡が出土。さらに8月~11月には3・5号墳墳丘崩落土の掘削を行う。11月22日には現地説明会を実施。全景写真撮影後3号墳墳丘の断ち割り調査、土層の剥ぎ取りを行う。12月19日に断ち割り部分を埋め戻し調査を終了した。



第1図 調査地位置図



第2図 表土除去作業



第3図 作業風景

2. 調査日誌抄

- 6月5日 3・5号墳墳丘測量、裾部表土掘削開始（国庫補助事業・範囲確認調査）
6月9日 本調査開始
6月11日 3号墳墳丘の表土剥ぎを開始。頂部は平坦で、赤土が露出する。
6月26日 大雨が続き、土砂流出が心配される。
7月4日 5号墳墳丘表土剥ぎを開始。墳丘裾部の検出を終了。
7月14日 3号墳頂にて鉄剣が出土。
7月16日 5号墳頂部検出。西側には大きな攪乱。
7月28日 裾部平坦面の精査を開始。
8月4日 裾部平坦面の測量を開始。
8月8日 夜半から台風直撃。暴風が吹き荒れる。
8月13日 3号墳にサブトレンチ、崩落土がかなり厚く堆積していることを確認。
8月18日 土坑から土師器甕、須恵器平瓶が出土。
8月25日 3号墳崩落土除去作業開始。3号墳主体部をトレンチ掘り。銅鏡が出土する。
8月27日 銅鏡出土状況を写真撮影。取り上げる。鏡の下から赤彩木片が出土。
9月9日 5号墳との境にも崩落土が多量に堆積していることを確認。
9月10日 5号墳崩落土除去作業開始。西側攪乱土坑を精査。頂部再精査も開始。
9月18日 平坦部にトレンチを設け、新たな方墳の周濠を確認。
9月20日～30日 調査中断。
10月1日 調査再開。3号墳墳丘崩落土最下層を掘削開始。
10月2日 主体部精査再開。
10月29日 3号墳崩落土除去作業完了。
10月30日 6号墳精査。土師器壺が出土。
11月7日 掘削後状況の測量図作成開始。
11月17日 記者発表。
11月22日 現地説明会を開催。
11月26日 5号墳断ち割りを開始。
12月2日 高所作業車で全景写真を撮影。
12月3日 3号墳断ち割りを開始。
12月12日 道具類撤収。土嚢、シート片付け。
12月17日 3号墳盛土土層はぎ取り。
12月19日 裾部採掘坑状遺構の断ち割り。墳丘トレンチを埋め戻し、調査完了。



第4図 現地説明会



第5図 高所作業車より撮影



第6図 断面はぎとり作業

第2章 位置と環境

安養寺遺跡は滋賀県栗東市安養寺に位置する。近江盆地の南部にあたる栗東市の地形は、南部が信楽山地の北縁に位置する山地で、金勝山（566.8m）、阿星山（693m）、龍王山（604.7m）がそびえる。中央部は標高150～200mの古琵琶湖層からなる丘陵地、および南部山地に源を発する河川が形成した谷底平野（標高160～110m）からなる。丘陵上には日向山（222.9m）、安養寺山（234.1m）等の山地が存在する。栗東市北部には沖積低地が広がり、野洲川が形成した扇状地となる。野洲川およびその旧流路、草津川等の周辺では河川の堆積物が形成する自然堤防状の微高地となっている。

栗東市で最も古くから人々が住んだ痕跡は、野洲川左岸の微高地上に位置する高野・辻遺跡でみられ、土坑状遺構から縄文時代前期前半の羽島下層式、北白川下層式の土器および炭化した木の実が出土している。高野・辻遺跡では縄文時代を通じ断続的に遺跡が展開する。また前期中葉以降になると葉山川流域にて集落が展開する。下鈎遺跡では、前期後半の竪穴住居・土坑・ピット群が検出されている。中期前半～後半には霊仙寺遺跡で、中期後半から後期にかけては狐塚遺跡・小柿遺跡で集落が展開する。

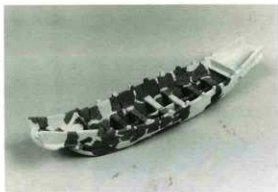
縄文時代晩期から弥生時代前・中期前半にかけて市内では低地にあたる霊仙寺遺跡（標高91m前後）で遺跡がみられ、木製農具や石包丁等が出土し、水田耕作に適した低地から稲作が始まったことを示している。この他中沢遺跡でも前期から集落が形成されはじめ、古墳時代まで継続する。

弥生時代中期末から後期になると、下鈎遺跡で環溝を伴う集落が形成され、日本最小の銅鐸が出土している。また金勝川右岸の坊袋遺跡でも中期末から後期にかけて、集落が形成されている。下鈎遺跡では後期後半になると、遺跡の西端部で大型建物2棟が確認される。また建物に隣接する河川から大量の弥生土器が出土し、銅鑑等の青銅製品がまとめて出土している。ほかに葉山川左岸の小柿遺跡でも後期後半から古墳時代初頭にかけて微高地上に集落が形成される。中ノ井川右岸の総遺跡では中期末から後期にかけて方形周溝墓からなる墓域が、十里遺跡では後期以降土墳墓からなる墓域が形成される。

古墳時代に入ると、野洲川左岸自然堤防状微高地（標高106～110m）が開発されるようになり、大規模な集落が形成されるようになる。前期より開始される集落には高野遺跡・岩畑遺跡などがあり、特に岩畑遺跡では前期段階より鉄器保有率が高い。前期末になると辻遺跡では集落内で、碧玉製玉作りを行っており、中期には滑石製玉作りを行うようになる。また初期須恵器や韓式系土器も出土し、渡来系氏族と関連の深い技術者集団が居住していたと考えられる。また中ノ井川流域の野尻遺跡では、古墳時代中期～後期の四周に濠・柵を巡らせる豪族居館とみられる遺構が検出されている。

古墳時代前期の古墳には六地蔵の丘陵上に築造された岡山古墳、野洲川左岸の亀塚古墳がある。また高野遺跡・岩畑遺跡・辻遺跡では前方後方形周溝墓が発見されている。安養寺山に連なる灰塚山山頂では前方後方墳が確認されている。栗東市に隣接する草津市域では、前期後葉に前方後円墳とみられる北谷11号墳（全長105m）が築造される。

中期になると古墳群は安養寺山西麓で展開する。安養寺山から派生する丘陵の端部には下味・新開・山ノ上・毛刈古墳がある。下味古墳は径35m、葺石・埴輪を持つ。主体部は小型の粘土槨で内行花文鏡、鉄剣、鉄製工具、石劔、玉類が出土している。新開1号墳は推定36mの円墳で、木棺直葬とみられる2基の主体部が確認されている。北遺構からは棺内より変形五獣鏡、盤龍鏡、玉類、堅櫛、武器が、南遺構からは棺内より変形



第7図 新開4号墳 船形埴輪

神獣画像鏡、堅櫛、玉類、鉄製工具、武器、甲冑が、棺外には盾などのほか鉄地金銅透鏡板付鉄轡や木心鉄板被輪鍔等の初期馬具が置かれ、朝鮮半島とのつながりが考えられている。新開2号墳は1号墳の北側に位置する約25mの古墳で、鉄製武器類のほか鉄挺10枚が出土している。新開4号墳は1号墳の南西に隣接する約15mの方墳で、埴丘より船形埴輪、家形埴輪、円筒埴輪等が出土している。山ノ上古墳では武器、玉類のほか斜縁二神二獣鏡が出土している。毛刈古墳は主体部が粘土槨で、四乳変形文鏡が出土している。

また丘陵の端部では中期前半に全長75mの前方後円墳である大塚越古墳が、引き続き北に隣接して全長99mの帆立貝式古墳である椿山古墳が築造される。さらに中期末には隣接する狐塚遺跡で、「木製埴輪」を有する全長32mの帆立貝式古墳が築造される。このほか金勝川左岸でも中期には下戸山古墳、地山古墳が築造される。

古墳時代後期には小槻大社古墳群、和田古墳群、日向山裾の日向山古墳群、上砥山古墳群等の古墳群が築かれる。終末期になると、新開古墳の西側に古墳4基が作られ、須恵質有蓋長胴棺が用いられた。

飛鳥～奈良時代には十里遺跡で「勾連」と書かれた飛鳥時代の木簡のほか、墨書土器や多数の畜具が出土し、評に関連した施設の可能性が考えられる。奈良時代になると岡遺跡に栗太郡衙が置かれ、回字状に配置された郡庁や正倉、館やその他の雑舎群が確認されている。岡遺跡では規模をやや縮小しながら、平安時代前期まで遺構が継続する。逆に奈良時代中頃以降には手原遺跡や草津市城の大將軍遺跡等で倉庫群が発見されており、役所機能が分散したことが考えられる。

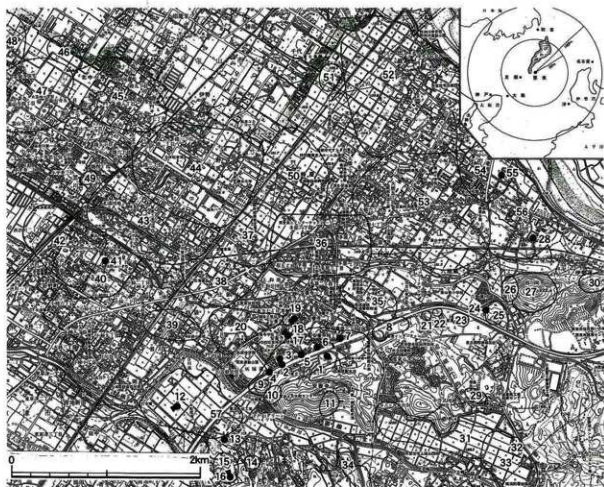
古代寺院は手原遺跡、霊仙寺遺跡（小平井廃寺）で確認されているほか、蜂屋遺跡、高野遺跡でも瓦が出土している。また瓦や須恵器を焼いた窯は山田窯など金勝川中流域の丘陵に造られ、飛鳥～平安時代に操業されている。

飛鳥～奈良時代の集落は辻遺跡、岩畑遺跡、狐塚遺跡、小柿遺跡などで発見されおり、奈良時代には掘立柱建物から構成される集落になる。中世になるとそれまで集落が見られなかった狐塚遺跡や総遺跡などにも集落が広がり、近世になると街道沿いなどで現集落の形ができていく。

参考文献

栗東町史編纂委員会『栗東の歴史』第1巻 古代・中世 1988

栗東町史編纂委員会『栗東の歴史』第4巻 資料編Ⅰ 1994



第8図 周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|-----------------|-----------|-----------|-------------|-----------|
| 1. 安養寺古墳群 | 2. 新開1号墳 | 3. 新開2号墳 | 4. 下味古墳 | 5. 山寺屋敷古墳 |
| 6. 山ノ上古墳 | 7. 毛刈古墳 | 8. 佐世川古墳群 | 9. 灰塚山古墳群 | 10. 和田古墳群 |
| 11. 五百井社古墳群 | 12. 地山古墳 | 13. 下戸山古墳 | 14. 小槻大社古墳群 | 15. 北谷古墳群 |
| 16. 北谷11号墳 | 17. 大塚越古墳 | 18. 椿山古墳 | 19. 椿山遺跡 | 20. 狐塚遺跡 |
| 21. 谷田古墳 | 22. 石場山遺跡 | 23. 北尾遺跡 | 24. 岡山古墳 | 25. 堂山古墳群 |
| 26. 日向山古墳群 | 27. 多喜山城跡 | 28. 大塚古墳 | 29. 上砥山古墳群 | 30. 小割遺跡 |
| 31. 上砥山遺跡 | 32. 樋ノ口遺跡 | 33. 中村遺跡 | 34. 山田窯 | 35. 小野遺跡 |
| 36. 手原遺跡 | 37. 下鉤東遺跡 | 38. 上鉤遺跡 | 39. 坊袋遺跡 | 40. 小柿遺跡 |
| 41. 小槻古墳群 | 42. 中沢遺跡 | 43. 下鉤遺跡 | 44. 野尻遺跡 | 45. 滝遺跡 |
| 46. 北中小路遺跡 | 47. 雲仙寺遺跡 | 48. 十里遺跡 | 49. 笠川遺跡 | 50. 蜂屋遺跡 |
| 51. 出庭古墳群(亀塚古墳) | 52. 辻遺跡 | 53. 高野遺跡 | 54. 岩畑遺跡 | |
| 55. 車塚古墳 | 56. 林遺跡 | 57. 阿遺跡 | | |

第3章 調査の概要

1. 調査前の状況

調査地は安養寺山裾から派生する丘陵上にあたる。現況は山林となっており、南側は名神高速道路によって丘陵が断絶されている。また西側は2002年度に調査が行われ、さらに調査後には土とりが行われており、丘陵の地層が露になっていた。調査区内にはこれまでから3基の古墳があるとされていたが、開発に当たり全面的に伐採が行われたところ、調査区内の南半部で2基の墳丘（新開3・5号墳）が確認できた。そこで発掘調査に先立ち墳丘部分の測量調査を実施した。

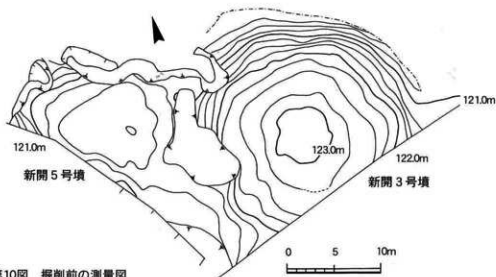
新開3号墳は調査区南西端に位置し、直径は約25m、高さは裾部から約3mを測る。頂部はやや平坦となっており、盗掘等で攪乱された痕跡はなかった。墳丘肩部には方形状に広がる部分があるが裾部はきれいな円形の等高線を描いている。新開5号墳との間は濠状に大きく掘られた攪乱によって分断されており、両墳間の関係は現況では明らかにならなかった。

新開5号墳は3号墳の西側にあり、西端部が削り取られ地層にも墳丘部分が現れていた。墳丘にはさらに大きな攪乱坑があることが地層から観察された。また北側裾部も大小の攪乱坑が認められ、墳丘の形状が判断出来ない状況であった。墳頂部は平坦になっていた。

3号墳の北側は丘陵が大きく落ち込んでおり、さらに攪乱のためかなり乱れていた。5号墳の北側、調査区中央部は広く平坦面になっていて、削平されたことがあるような状況であった。調査区北西端は地形的に大きく落ち込んでいる。



第9図 調査前の状況（新開3号墳）



第10図 掘削前の測量図

2. 検出遺構および出土遺物

(1) 新開3号墳

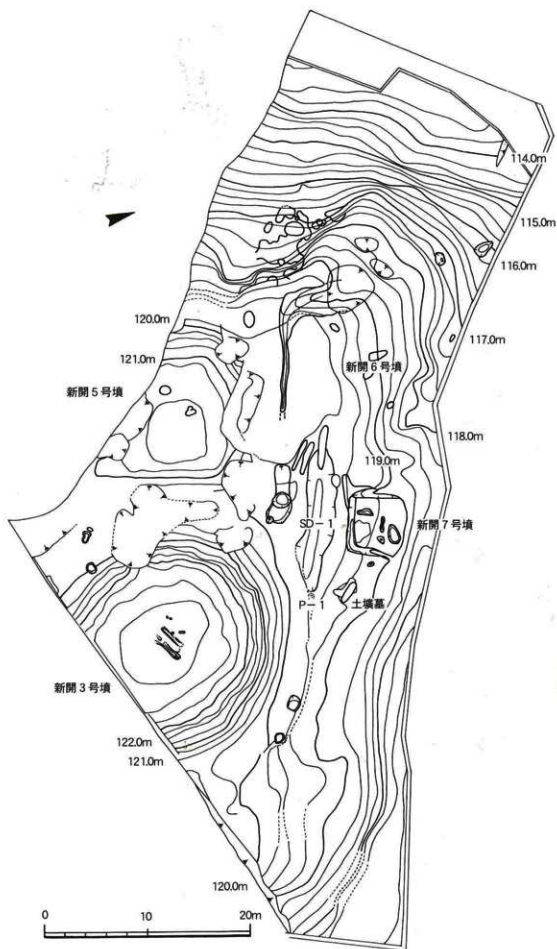
主体部（第13図） 墳丘の頂部でかろうじて、床面近くと思われる棺の痕跡が2基認められた。棺1は残存部分で幅0.5m、長さ約2.5m、残存していた深さは最大で0.15mを測る。長軸はN-60°-Eにむけられていた。埋土の下層は灰白味がある褐灰茶色粘質微砂質土、上層は褐灰茶色粘質微砂質土に赤褐色土ブロックを含み、上層には周囲からの崩壊土が流入していると考えられる。断面形態で見る限り、棺床は丸みを帯びる。棺1西南端は方形に凹んでおり、コーナー部はやや突出している。西南端の外側では赤褐色粘土ブロックが若干見られ、棺を固定していた可能性がある。棺2は棺1と並行して検出された痕跡で、幅0.5m、長さ2.1m以上を計る。北東端部は2cm程度の窪みがある。棺1と同一の墓壇内に設置されたものと考えられる。

墳丘（第12図上） 墳丘からは多量の土が崩落しており、裾部にかけて厚く体積していた。これを掘削したところ墳丘は直径約22mの円墳であることが明かになった。墳丘斜面は頂部同様崩壊が進んでいて、裾部にかけてなだらかに下がっている。葺き石は認められなかった。北側の丘陵裾から墳頂部の比高差は約3mを測る。調査区南端部のA-A'間断面では、幅3.0m、深さ0.4mの周濠の外側に土手状に盛り上がり、さらに西側に向けて窪んでいる状況が見られた。

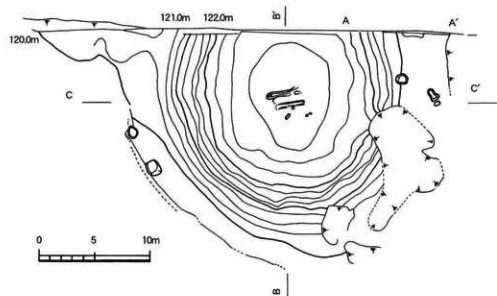
崩落土の状況は、C-C'間東側断面で下層に約0.2mの黒灰色土が堆積、上層は約0.5mの黄灰色土が堆積する。B-B'間北側では下層に約0.1mの黒灰色土が堆積、上層は約0.4mの黄灰色土が堆積する。5号墳との間でも同様の堆積がみられたが、堆積土は攪乱によってえぐられており、堆積土の新旧はわからなくなっていた。但し調査区西端部土層（第20図）からは堆積土が3・5号墳双方から徐々に埋没していった状況がうかがえた。

墳丘裾部には多数の土壌が認められた。概ね近世以降のものである。隣接する新開西古墳では同様の土壌から人骨が発見されているので、本調査区出土の土壌も近世以降の墓であった可能性が高い。

墳丘盛り土（第12図） 主体部の軸方位に従って墳丘の断ち割り調査を実施した。丘陵上部から下部にかけてのB-B'間断面では墳頂部から約1.5m下に厚さ約10cmの炭化物を含む層が認められた。同様の炭層が丘陵上部（3号墳側）では標高122.0m、下部（5号墳側）では121.0mに認められ、比高差約1mで丘陵下部に向けゆるやかに下っている。炭層の下部は橙味黄灰色土で比較的均質な層をなしている。炭層の上部は墳丘斜面近くで黄灰色土等を中心に層状をなし、頂部下では赤土のブロック土を含む橙赤色および黄灰色土が互層になっている。こうした状況より、炭層下部はもとの丘陵堆積土で、上部は周囲の土を盛上げた人為的な盛り土部分と判断された。盛り土の手順としては、丘陵堆積土によって西側を盛り上げ、さらに頂部下を残して、墳丘斜面にあたる部分をドーナツ状に盛り上げる。最後に墳頂下部分を構築するが、このときは斜面部分とは違い、丘陵の土の中でも下部の赤土層を削った土を用いて固めながら構築していたものとみられる。丘陵に直交するC-C'間でも同様の土層が認められた。なおこの部分ではほんの少しではあるが、ももとの丘陵が西から東にかけてゆるやかに傾斜している様子がうかがわれた。



第11図 安養寺遺跡 遺構図



1. 黄灰色粘質微砂質土 (やや暗い)
2. 赤味黄灰色粘質微砂質土
3. 黄味暗灰色粘質微砂質土
4. 明黄灰色粘質微砂質土
5. 黄灰色粘質微砂質土、赤白色・褐色、灰白色ブロック土を含む
6. 暗灰褐色粘質微砂質土
7. 暗灰褐色粘質微砂質土
8. 黄味褐色粘質微砂質土

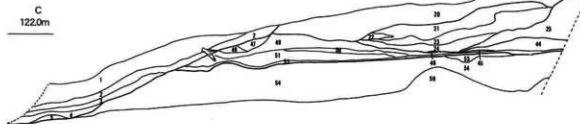
9. 灰白色粘質土
10. 暗灰色粘質微砂質土
11. 黄灰色粘質微砂質土 (1~11 境丘南東)
12. 主体部 (p-13にて詳述)
13. 主体部 (p-13にて詳述)
14. 主体部 (p-13にて詳述)
15. 赤味明黄灰色粘質微砂質土、赤土・灰白色土ブロックを含む

16. 明黄灰色粘質微砂質土
17. 明赤灰色粘質微砂質土、灰白色粘土・赤白色粘土、赤色のブロック
18. 明黄灰色粘質微砂質土
19. 赤褐色粘質微砂質土
20. 暗味明黄灰色粘質微砂質土、赤褐色土ブロックを含む
21. 19と同じ

1. 腐植土
2. 黄灰色粘質微砂質土
3. 明黄灰色粘質微砂質土
4. 暗味黄灰色粘質微砂質土
5. 黄味黄灰色粘質微砂質土
6. 黄味灰褐色粘質微砂質土
7. 黄灰色粘質微砂質土
8. 暗灰色粘質微砂質土
9. 5と同じ
10. 5と同じ
11. 明黄灰色粘質微砂質土
12. 灰褐色粘質微砂質土
13. 黄味明黄灰色粘質微砂質土
14. 黄味灰褐色粘質微砂質土
15. 暗灰色粘質微砂質土

22. 赤味黄灰色粘質微砂質土
23. 赤褐色粘質微砂質土、明黄灰色土・1~2cmの礫を含む
24. 20と同じ
25. 暗味明黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロックを含む
26. 暗味赤褐色粘質微砂質土
27. 暗味黄灰色粘質微砂質土
28. 暗褐色粘質土、明黄灰色土が混ざ
29. 赤味黄灰色粘質微砂質土
30. 明黄灰色粘質微砂質土
31. 28と同じ
32. 暗味明黄灰色粘質微砂質土
33. 暗味黄灰色粘質微砂質土
34. 黄味灰褐色粘質微砂質土
35. 黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロックを含む
36. 明黄灰色土と赤色土のブロック
37. 明黄灰色粘質微砂質土
38. 36と同じ
39. 赤味黄灰色粘質微砂質土
40. 黄褐色粘質微砂質土
41. 暗味黄灰色粘質微砂質土
42. 赤味黄灰色粘質微砂質土
43. 明黄灰色粘質微砂質土

44. 明黄灰色粘質微砂質土
45. 暗味明黄灰色粘質微砂質土
46. 明黄灰色粘質土に炭を多く含む
47. 46と同じで炭が少な
48. 灰白色砂質土 (15~48 境丘南東)
49. 赤味黄灰色粘質微砂質土
50. 暗味黄灰色粘質微砂質土、1cm位の礫を含む
51. 赤褐色粘質微砂質土
52. 暗味灰白色粘質微砂質土
53. 51と同じ
54. 赤色粘土 (49~54 地山)



1. 黄味灰褐色粘質微砂質土
2. 灰褐色粘質微砂質土
3. 赤味暗灰色粘質土
4. 暗灰色粘質微砂質土
5. 暗灰色粘質土
6. 腐植土
7. 灰褐色粘質土、褐色土を含む
8. 黄灰色粘質微砂質土
9. 黄灰色粘質微砂質土
10. 灰褐色粘質土に赤褐色土ブロックを含む
11. 黄褐色粘質土
12. 灰褐色粘質土

13. 黄味暗灰色土
14. 黄褐色粘質土と黄灰色土が混ざ
15. 黄褐色土
16. 明黄灰色土と黄褐色土が混ざ
17. 暗灰色土 (1~17 境丘南東)
18. 主体部 (p-13にて詳述)
19. 赤褐色粘質微砂質土
20. 暗味明黄灰色粘質微砂質土、赤褐色土ブロックを含む
21. 赤味黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロックを含む

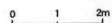
22. 明黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロックを含む
23. 22と同じ
24. 赤味黄灰色粘質微砂質土
25. 暗味黄灰色粘質微砂質土、明黄灰色土・1~2cmの礫を含む
26. 赤味黄灰色粘質土、粗砂混じり
27. 明黄灰色粘質土、赤色土ブロックを含む
28. 明黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロックを含む
29. 赤味明黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロックを含む

30. 暗味黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロック (1~2cm) を含む
31. 明黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロック (1~2cm) を含む
32. 20と同じ
33. 31と同じ (全々明るい)
34. 明黄灰色粘質微砂質土、炭を含む
35. 暗味黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロック (約5cm) を含む
36. 黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロックを含む

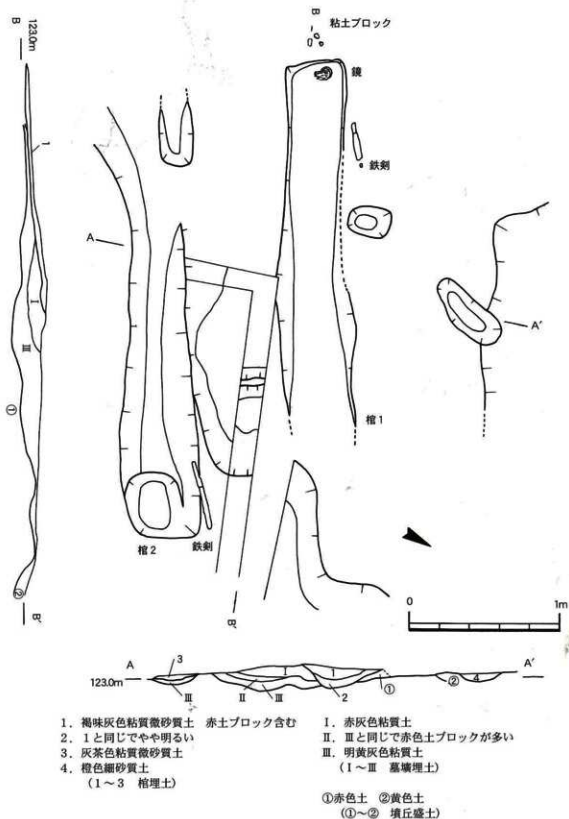
37. 明黄灰色土、赤色土のブロック
38. 明黄灰色粘質微砂質土
39. 明黄灰色粘質微砂質土と赤色土のブロック
40. 赤味明黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロック (2~3cm) を含む
41. 明黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロック (2~10cm) を含む
42. 明黄灰色粘質微砂質土、炭を多く含む
43. 黄褐色粘質微砂質土、炭を多く含む
44. 明黄灰色粘質微砂質土
45. 明黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロックを少量含む
46. 明褐色土、白色細砂・礫を含む

47. 赤味黄灰色粘質微砂質土、赤色土ブロック (10cm) を含む
48. 暗味黄褐色粘質微砂質土、赤色土ブロックを含む
49. 明黄灰色粘質微砂質土
50. 赤味明黄灰色粘質微砂質土
51. 49と同じ
52. 明黄灰色粘質微砂質土、炭を多く含む
53. 黄褐色粘質微砂質土、炭・土・塊土を少量含む
54. 赤味明黄灰色粘質微砂質土

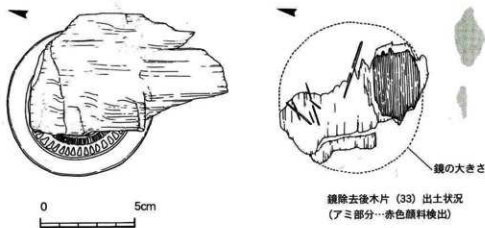
55. 明黄灰色粘質微砂質土
56. 赤味灰褐色土
57. 黄味灰白色粘質土
58. 明黄灰色粘質土、赤色土を含む
59. 灰赤色粘質土 (53~59 地山)



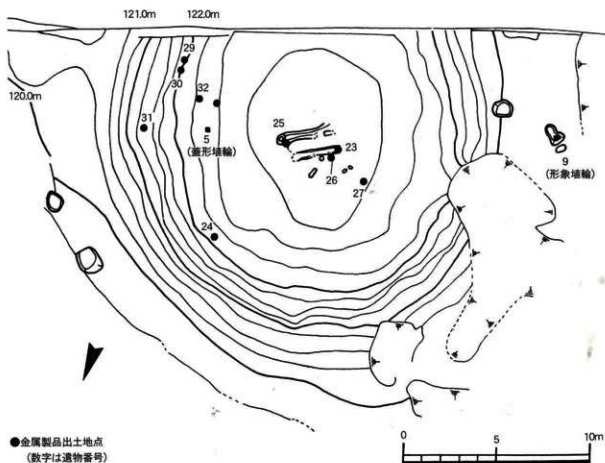
第12図 新聞3号墳 境丘断面図



第13図 新開3号墳主体部実測図



第14図 新開3号墳主体部 鏡および木片出土状況



第15図 新開3号墳金属製品等出土地点

遺物出土状況 棺1からは、南西端部で振文鏡が出土した。鏡面は下向きで水平に置かれていた。鏡の上・下には木片が残されていた。鏡上の木片は木目を棺に直交し、下の木片は木目を棺に平行して出土した。下の木片は赤彩が認められた。なおこの赤色顔料は蛍光X線分析によりベンガラと判断された。棺1にそって西端から約1mの地点では剣1振が出土。切先を東に向けた状態で出土している。棺2からは東端部で剣1振が出土。棺1同様切先を東に向けた状

態で出土している。棺2の剣周辺からは赤色顔料が点々と検出されている。

この他、墳丘肩部の崩落土中からは鉄製鍔・劔先、小型鉄斧、釘、蓋形埴輪等が出土している。さらに崩落土中からは円筒埴輪、朝顔形埴輪、石鏃、サヌカイトチップ、弥生土器などが散見される。西側裾部では扁平片刃石斧が出土した。3号墳C-C'セクションでは崩落土を切り込む攪乱土壌から、船形もしくは家形埴輪の可能性がある形象埴輪片が出土した。この埴輪を含め、埴輪片の多くが墳丘南西よりで出土している。墳丘北側の崩落土上層からは瓦質羽釜が、南西側の5号墳寄りの崩落土中からは須恵器坏身・蓋が出土した。

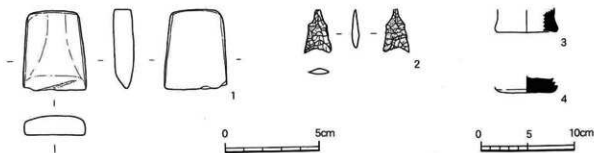
新開3号墳出土遺物

古墳築造以前の遺物

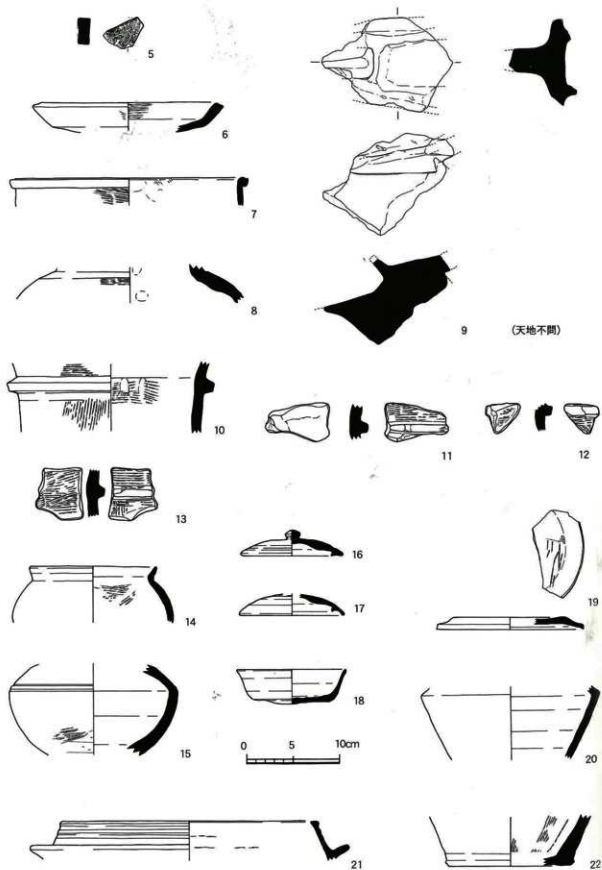
3は縄文土器と考えられる底部の破片で、墳丘盛土から出土。底部径は6.8cm。胎土は粗く、黒褐色を呈する。2～4は崩落土から出土。4は弥生土器と考えられる底部の破片で径5.9cm。にぶい褐色を呈する。1は扁平片刃石斧で、長さ4.2cm、幅3.3cm、厚さ1.05cm。2は石鏃でサヌカイト製。基部は半円状にえぐり、側縁部の肩が張るものである。最大長2.3cm、最大幅1.4cm、最大厚0.35cm。

古墳築造～埋没過程の土器

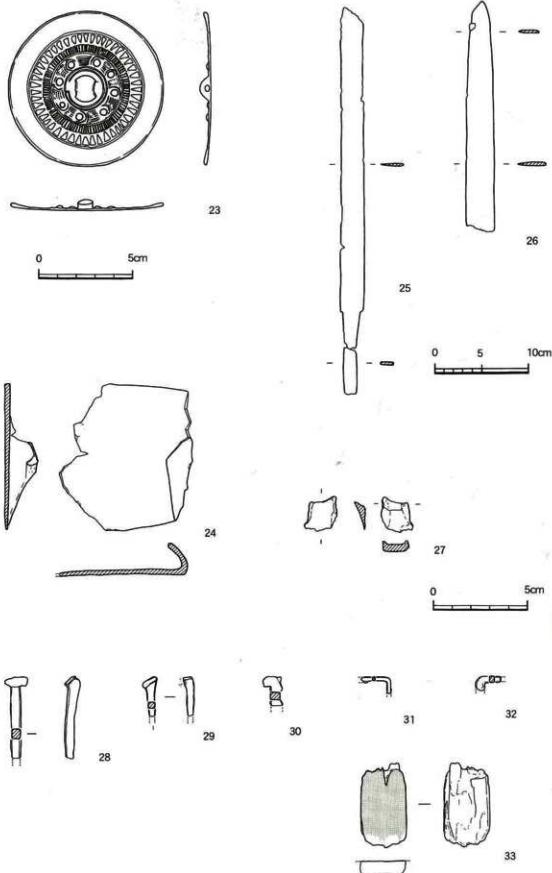
5は蓋形埴輪の立ち飾り先端部の破片である。崩落土から出土している。厚さ1.2cmで、外形に沿って線刻を施す。6は口径18.4cmで、器財埴輪片である。8は朝顔形埴輪の肩部破片で、内湾しつつ内傾している。外面は横方向の刷毛で調整、内面は指で押さえる。9は形象埴輪の破片である。墳丘西側裾部の崩落土堆積後に掘られた土壌から出土した。断面がやや三角形形状を呈する板状の部分と幅9.5cm程度の板状の部分が断面T字状に貼り付く。さらに平らな板状の部分にはH状に粘土が貼り付けられる。断面三角形部分の外面には沈線が一条見られる。全体がナデによって仕上げられている。船形埴輪もしくは家形埴輪片の可能性がある。7、10～13は円筒埴輪である。7は表土下で、10～13は南西側の崩落土から出土している。7は口縁部で、端部を外側に折り返す。外面はヨコハケ、内面はハケ後ナデで調整している。口径23.8cm。10は径20cm以上、外面に断面台形で高さ1cmのタガを貼り付ける。タガの上部はB種ヨコハケ、下部はタテハケで調整、内面はヨコハケ、指押さえの痕跡が残る。11は台形のタガを貼り付け、外面をヨコハケで調整する。12は若干M字状を呈するタガを持つ。外面はB種ヨコハケで調整。黒斑がある。13は台形のタガを貼り付け、円形の透かし孔を持つ。



第16図 古墳築造以前の遺物



第17図 新開3号墳 出土土器実測図



第18図 新開3号墳 出土金属製品および木片実測図

外面は上部がB種ヨコハケ、下部はタデハケ後ヨコハケで、内面はヨコハケで調整する。黒斑がある。14は崩落土から出土した土師器甕である。口径13.6cm。体部は丸く、口縁部はくの字に外傾する。15は表土下、崩落土、攪乱坑に破片が散乱していた須恵器壺。体部1/3をヘラ削り、その後一部ハケを施しさらに体部2/3を回転ナデで調整。肩部との境に2条の沈線がある。肩部には自然釉が付着。16~18は3号墳と5号墳の間の崩落土から出土した須恵器灯蓋・身である。16、17は蓋で、口径11.0cm。口縁端部内面には短いかえりをもつ。16は天井部に擬宝珠様のつまみを貼りつけ、自然釉がみられる。18は身で、口径11.5cm。底部は平底で口縁部はやや外反気味にのびている。16~18は7世紀後半のものである。19は須恵器の蓋で、天井部は平坦で口縁端部を下方に屈曲させる。天井部外面にはヘラガキが見られる。口径15.6cm。8世紀後半のものである。20は須恵器壺で、体部は外反して立ち上げ、肩を張るものである。21は崩落土上層の黄色土から出土した瓦質羽釜である。口径26.6cm。体部の破片も多数出土したが接着し得なかった。22は信楽播り鉢。播り目は5本であるが、使用によりほとんどすり消えている。底部径は13.8cmである。

金属器 23は主体部南西端で出土した振文鏡である。直径8.2cm。厚さは薄い部分で1mm程度。52.8g。鈕は半球状で径1.4cm。断面楕円形の鈕孔をあける。鈕の周囲は二重の圈線を巡らす。その外側には径約4mmの小乳を8個ほぼ等間隔に配置する。乳の周囲は圈線が2条半周しており、逆C字状の連なりとなっている。乳と乳の間は5条の凸線で埋められている。さらに外側は幅4mmの鋸歯文帯、その外側に鋸歯文帯を配置する。縁部は丸みがある。約2mmの反りがある。外面の窪み部はベンガラが付着している。25・26は鉄剣である。25は棺2で、腐葉土直下より切っ先を北を約60°東に向けて出土。現存長40.9cm。両端部分が失われている。刃部は幅2.3から2.6cm、厚さ3mm。茎部は断面長方形で幅1.4cm、厚さ4mm。24は第1主体部で腐葉土直下より切っ先を北を約60°東に向けて出土。刃部のみが残存している。現存長24.5cm。最大幅3.0cm。27は墳丘の頂部から斜面にかけての落ち際から出土。鉄製鉄・鋤先である。長さ7.7cm。幅は7.0cm以上である。側部を折り返す。刃先はやや丸みを帯びる。27は崩落土から出土した小型鉄斧。現存長3.7cm。厚さは基部で9mm、刃部にむけ尖らせている。

28~33も墳頂部から斜面にかけての崩落土中から出土。28から30は釘。29は全長4.3cm以上、断面は方形で頭部を折り返す。31は幅2mm。32は幅3~4mmを測る。

木製品 33は、主体部振文鏡の直下でかろうじて残されていた平坦な木片である。鏡に接していた部分がよく残されており、赤色顔料が付着していた。蛍光x線分析では銅、鉄が検出さ

表1 振文鏡・赤彩木片 蛍光x線分析データ

番号	遺物名	検出元素（濃度％）
B	振文鏡	Sn56.9258 Cu23.2083 Pb11.9396 As3.0713 Fe1.8583 Bi0.8649 Ag0.6688
B	赤彩木片	Cu55.46 Fe27.51 Pb17.03

*分析は（財）滋賀県文化財保護協会 中川正人氏による。

れており、ベンガラと推定できる。残存長4.5cm、残存幅2.4cm、残存厚0.8cm。

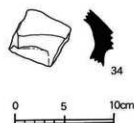
2) 新開5号墳

墳丘の崩落と新しい時期の攪乱坑により5号墳の墳形は著しく改変されている。墳丘の崩落土を除去すると、墳形は一辺17mの方墳であることが明らかになった。3号墳同様墳丘斜面には崩落土が厚く堆積していた。墳形がよく残っていた東側では幅約1.7mの周溝がみられた。墳頂部は再三の精査を行ったが埋葬施設の痕跡は認められなかった。南側崖に露呈していた土壌状の凹みは近代以降の陶器を含む土壌であることが判明した。他にも墳頂部には近、現代の攪乱が見られた。

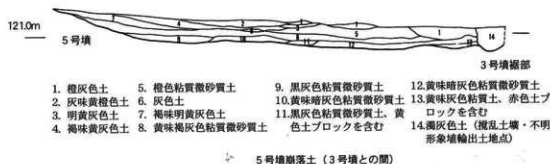
墳丘の断ち割り調査では頂部より約0.2m下がったレベルで、3号墳でみられた炭層が確認できた。炭層は丘陵下部の東側に向けて緩やかに下がっている。

5号墳で出土した遺物は、いずれも崩落土中からである。埴輪片、須恵器小片が発見されている。

出土遺物 34は西側斜面の表土下で発見された形象埴輪片である。丸みのある体部に張り出した部分を設け、さらに幅1cm以上の突帯状のものを下方に向けて貼り付けている。器壁の厚さは2cm程度。



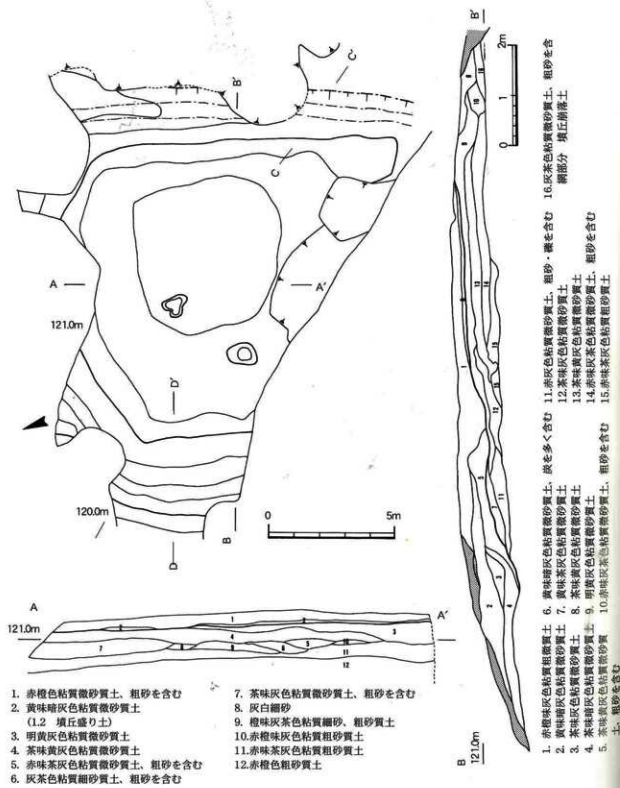
第19図 新開5号墳出土遺物



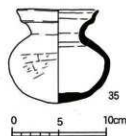
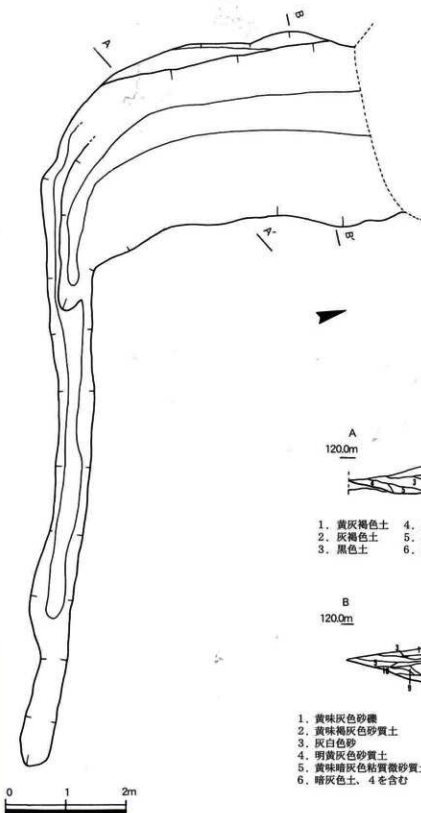
- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. 黄灰色粘質微砂質土 | 5. 黄味灰色粘質微砂質土 |
| 2. 褐味黄灰色粘質微砂質土 | 6. 褐味暗灰色粘質微砂質土 |
| 3. 褐味暗黄灰色粘質微砂質土 | |
| 4. 黒灰色土 | |

5号墳崩落土（D-D'間）

第20図 新開5号墳崩落土土層図



第21図 新聞5号墳 測量図および盛土断面図



周溝出土遺物

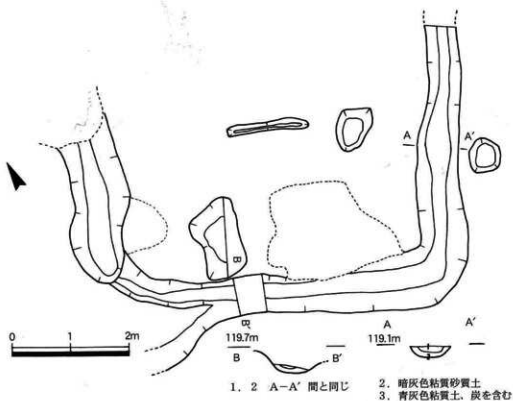


- | | |
|----------|---------|
| 1. 黄灰褐色土 | 4. 灰褐色土 |
| 2. 灰褐色土 | 5. 黑灰色土 |
| 3. 黑色土 | 6. 灰黄色土 |

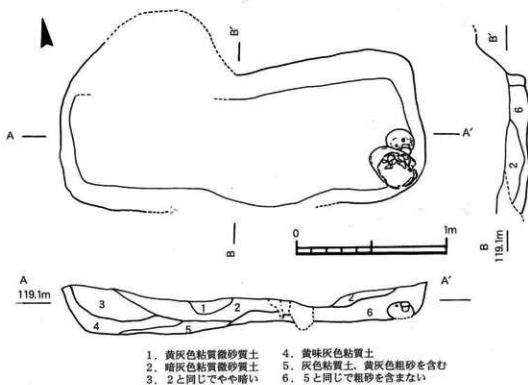


- | | |
|----------------|-----------------|
| 1. 黄味灰色砂礫 | 7. 6と同じでやや暗い |
| 2. 黄味褐色砂質土 | 8. 灰黑色微砂質土 |
| 3. 灰白色砂 | 9. 黑灰色土黄灰色を含む |
| 4. 明黄灰色砂質土 | 10. 黄味灰褐色粘質微砂質土 |
| 5. 黄味暗灰色粘質微砂質土 | 11. 暗灰色粘質微砂質土 |
| 6. 暗灰色土、4を含む | |

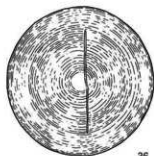
第22図 新開6号墳および出土遺物実測図



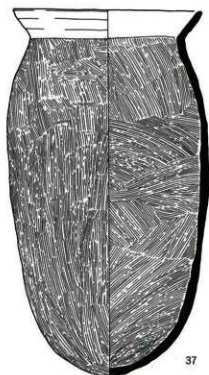
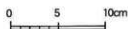
第23図 新開7号墳実測図



第24図 土墳墓実測図



36



37

第25図 土壙墓出土遺物



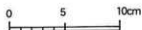
第26図 P-1 実測図



38



39



第27図 P-1 出土遺物



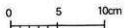
40



41



42



第28図 包含層出土遺物

(3) 新開6号墳

5号墳北側に広がる平坦面から検出された。表土を掘削した段階では南辺の溝がわかっていただけであった。そこで伐根による攪乱部およびトレンチ掘り部分を精査したところ、黒色土がレンズ状に堆積している様子を確認でき、古墳の周溝と判断された。この溝により判断される古墳の規模は、一辺10m以上の方墳で、墳丘は既に削平を受けている。周溝は西辺および南辺で残存しており、西辺で幅約3.3m、深さ0.6mを測る。

上層は層厚約0.25mで黄味褐色土が堆積し、下層は0.35mで黒灰色土が堆積している。南

辺では幅0.6m、深さ0.1m程度、東辺では溝が途切れている。北辺は既に削平されているものと考えられる。南西コーナー下層から土師器壺が1点出土した。

出土遺物

35は土師器壺である。周濠コーナー部の黒褐色土層から出土した。丸い体部に、外反し段を持つ口縁部をつけ、二重口縁状になっている。体部下半はヘラ削りで調整。上部は摩滅のため不明である。口径8.5cm、最大幅10.6cm、器高9.9cm。にぶい黄褐色を呈する。

(4) 新開7号墳

3号墳の北側で検出された一辺約5mの方墳で、墳丘は既に削平されており木の根による攪乱も著しい。かろうじて残された周溝は幅0.6～0.7m、深さは0.1～0.2mを測る。埋土は暗灰色土、下層は黄灰色土である。出土遺物はなかった。5～7号墳は軸方位がいずれもN-16°-Eと共通している。

(5) 土壇墓

新開7号墳の南東で発見された土壇である。長軸を概ね東西方向にとり、2.35mを測る。幅は約0.9m。残存する深さは約0.3m～0.4mで、埋土は灰色土を基本とする。西隅の土壇底には、須恵器平瓶および土師器長胴甕が1点ずつ据え置かれていた。

出土遺物

36は須恵器平瓶。底部から肩部にかけて丸味がある。口縁部は緩やかに外弯しながら外反する。底部と肩部はカキ目調整で、境目をヘラ削りで整えている。肩部の把手部分にはボタン状のものをはりつける。底部にはノ状のヘラガキが見られる。37は土師器長胴甕。底部は丸く体部は長い。口縁部は外反する。外面は縦方向のハケで調整、内面は下部を斜めに、中部を不整方向に、上部を縦方向にハケ調整する。口径20.2cm、最大径21.6cm、器高38.7cmである。

(6) その他

SD-1 調査区中央部分で発見された溝である。約11mにわたって検出されており、幅約2.8m、深さは約0.1mで、暗灰色土を埋土とする。明確な出土遺物はなく時期は不明である。

P-1 新開3号墳の墳丘北側に接して検出された遺構。径0.34m×0.2mで炭化物が堆積する。土師器皿(38)、黒色土器碗(39)が出土した。検出面からの深さは3cm程度である。

近現代土壇群 3号墳裾部、5号墳頂部を中心に幅1m内外の円形もしくは方形の土壇が多数発見されている。5号墳裾部のように長さ2m以上を測るものもある。出土遺物には近代以降の陶器等がある。またほかに、3号墳の北側および5号墳北側には径2m程度の井戸状遺構があるが、時期は不明である。

探掘坑状遺構 調査区北角部で発見された。丘陵裾部に幅約1mの横穴が開口しており、丘陵に向かって、斜めに掘削されている。天井部はかまぼこ状を呈する。約1.5m程入ったところで坑は水平になり、そのままのびていた。危険性が高いため、全体の形状等は調査出来なかつ

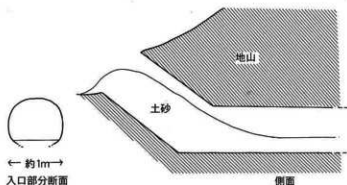
た。下戸山の丘陵周辺では、近代にマンガン採掘がさかに行われており、今回検出された遺構もそうした採掘坑の可能性が考えられる。



第29図 古墳周辺土壌出土陶磁器



第30図 採掘坑状遺構検出状況



第31図 採掘坑状遺構略図

第4章 小 結

1. 古墳築造以前の状況

安養寺山山麓では、古墳築造以前の遺構は発見されていない。しかし調査区の西南400mにある和田古墳群では、石鏃11点、石匙1点、剥片2点が出土している。また西南約100mの地点にある下味古墳では縄文土器片、弥生土器片の出土が報告されている。調査区の西に隣接する新開西古墳群では石鏃2点および手焙型土器片が出土している。今回の調査では墳丘崩落土や攪乱土壌から縄文時代と推定される石鏃・剥片・土器片が、盛り土中から弥生土器片・墳丘裾部から扁平片刃石斧が出土し、安養寺山西麓から北麓にかけて縄文～弥生時代の遺物の分布が明らかになった。

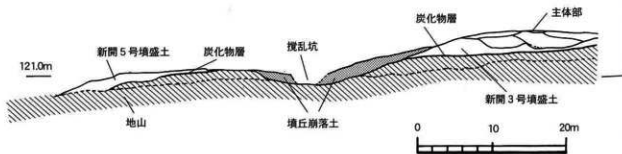
縄文時代中期～後期には、今回の調査区の北約400～600mの地点に位置する狐塚遺跡で集落が営まれており、山麓は縄文時代の人々の活動の場になっていたものと思われる。

栗東市内の弥生時代の主な遺跡は平野部の地域で展開するが、安養寺遺跡の北側に隣接する狐塚遺跡でも、包含層や土壌から弥生後期後半から末にかけての土器が出土している。今回の調査では扁平片刃石斧が出土し、山麓では樹木の伐採とともに加工も行われていたと考えられる。

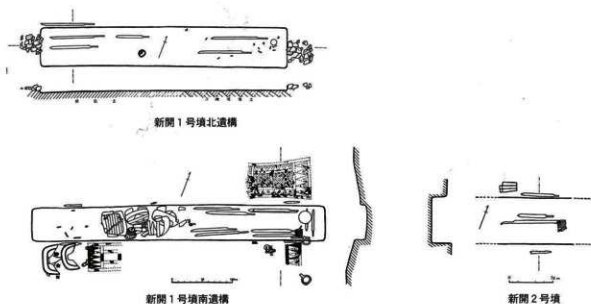
2. 新開3・5号墳の構造

造成 盛り土の断り割り調査では、古墳時代に造成される以前の斜面とみられるなだらかなラインで、幅5cm程度の炭層の堆積がみられた。古墳時代には原野であった安養寺山麓が、造成に先立って一挙に開発された痕跡であろう。

墳丘 3号墳の断り割りでは盛り土の状況が観察できた。墳丘は円形状に斜面が削りだされたあと、丘陵下部より土手状に盛り上げられ、墳丘には大きくぼみができたような状態であったと思われる。このとき盛られた土には比較的新しい時期の丘陵堆積土を使用したようである。さらに次の段階にはくぼみの内部で、墳丘北側から西側にかけて盛り土が築かれ、比較的硬い赤土によって徐々にくぼみが埋めていった。これは北條芳隆氏の分類する古墳の土盛り作業手順1類に類似する点がある（註1）。また当初の土壌の高さは約1.2mで、1類の土盛りによって作られる土壌の基準の高さと合致することから、築造は一定の高さの基準をもって行われたと考えられる。



第32図 新開3・5号墳盛土状況略図



第33図 新開古墳群主体部実測図
滋賀県教育委員会『滋賀県史跡調査報告書』第12冊1961より引用

新開古墳群では1、2号墳でも葺き石がみられないこれは新開古墳群の特徴のひとつであるとともに、1～3号墳で土砂の流出が著しく、主体部の寸前まで土砂流出が進んでいたことの原因の一つともなったと考えられる。

主体部 安養寺山麓に点在する中期古墳の主体部には、粘土槨・木槨直葬がある。下味古墳では粘土槨による2基の主体部があり、それぞれ小型の粘土槨を伴っている。第1主体部では、礫敷の上に粘土床を据え、さらに両サイドを礫敷にする。第2主体部では礫敷はみられないが棺の西南端に80cm四方・厚さ20cmの礫石積みもち、第1主体と同じく小型の粘土槨が併設される。いずれも小型の粘土槨からは遺物が出土していない。佐世川古墳では粘土槨が1基検出されている。毛刈古墳、山ノ上古墳でも粘土床の一部が発見されている。

新開1号墳では2基の主体部があり、北側の主体部は木槨直葬で棺の両端部を準大の割石で固める。南側の主体部も木槨直葬で、棺両端部は粘土を多く含んだ赤土で固められている。新開2号墳も木槨直葬であるが、両端部は既に崩壊している。新開3号墳では粘土床等の構築物はみられず、木槨直葬であった。棺の端部に若干の粘土塊がみられたので、新開1号墳南遺構のように棺の端部を粘土で固める造りであったと推定できる。大崎隆志氏によると、安養寺山古墳群では主体部の構造が粘土槨B型→粘土槨A型→木槨直葬A型の順に編年できる(註2)。新開3号墳は1号墳と同様の構造を持つことから、年代的に近いと考えられる。

3. 新開3号墳出土遺物について

新開3号墳で出土した振文鏡は、外区を鋸歯文+櫛歯文で、内区は8乳間を(線および平行線)でうめるものである。森下章司氏の分類では振文鏡の房文系2式にあたり、内区の文様は竜鏡の神像胸部表現からとりいれられたものとされる。(註3)。本例は新開1号墳から出土している「変形五獣鏡」(註4)と、外区の文様や紐を巡る圏線等に共通点がみられる。この鏡では内区の獣形部分は乳間の平行線の中央部に縦線があり、蟹様の文様となっている。いずれ

も古墳時代前期に見られる葦竜鏡系の最終段階のものである。

滋賀県内出土の古鏡は西田弘氏によってまとめられている(註5)。これによれば、旧栗太・野洲郡に出土数が集中していることがわかる。このうち旧野洲郡では古墳出土鏡のうち舶載鏡10面、仿製鏡6面と、舶載鏡が多数を占めている。逆に旧栗太郡では舶載鏡が5面、仿製鏡11面が古墳から出土している。これは栗太郡内において中期古墳が卓越していることと連動した現象であろう。また仿製鏡の内多くが安養寺山裾の古墳に集中している。今後鏡の入手経路や製作工人などについて詳細に検討していく必要があらう。

4. 新開3号墳と安養寺山裾の古墳群

新開3号墳では古墳に確実にともなっている遺物は、主体部の鏡・剣、崩落土の鉄製工具類、埴輪と限定されている。このうち鉄製鍬・鋤先は概ね4世紀中葉から5世紀前半までのものが多く、6世紀初頭から前半には消滅するものである(註6)。鏡は先に見たように古墳時代前期の最終段階のものである。埴輪は外面調整がB種ヨコハケによるもので、黒斑がみられるものが含まれる(註7)。また主体部の構造は、隣接する新開1号墳のものと類似しており、近接した時期につくられていることが想定できる。これらのことから新開3号墳は、新開1、2、4号墳と同様、古墳時代中期でおおむね5世紀前半代の古墳と考えられる。

また、新開6号墳から出土した土師器壺は布留式新段階に相当するものと考えられ、他の古墳にやや先行してつくられた可能性がある。新開古墳群では先に見たように丘陵が一度に開発されているが、古墳の配置が選定されたのち、6号墳のような小規模古墳から築造されていたのであろう。

近年の栗東市内の発掘調査では、地山古墳や椿山古墳等、中期につくられた首長墓の近辺から中小古墳や低墳丘の古墳が発見され、首長墓を中心とした序列も徐々に明らかになりつつある。今回の調査では丘陵につくられた円墳の周囲にも序列を持った古墳が取り巻いていることが明らかになった。これにより新開1号墳が、副葬品の内容でも示されるように、他の中規模古墳とは隔絶された首長墓クラスの古墳であることをより明確化したものといえよう。

註・参考文献

註1 北條芳隆「墳丘築造における土壌の意味」『鳥居前古墳—総括編—』1990

註2 大崎隆志「近江安養寺古墳群についての二、三の検討」『滋賀考古』1992

註3 森下章司「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号1991

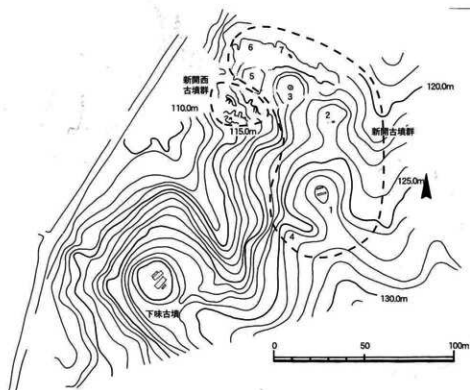
森下章司「古墳時代和鏡」『考古資料大観5 弥生・古墳時代 鏡』2002

註4 樋口隆康氏は『古鏡』(1979)で振文鏡Ⅱ類に含めている。森下氏の分類(註3)では倭文系に含まれる。

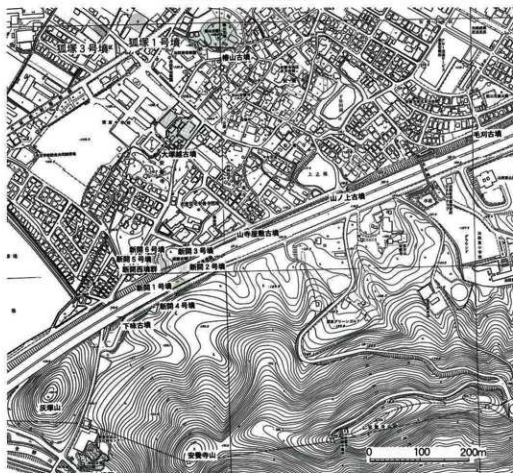
註5 西田 弘「近江の古鏡Ⅰ～Ⅱ」『文化財教室シリーズ105～107』1989

註6 松井和幸「日本古代の鉄製鍬先・鋤先について」『考古学雑誌』第72巻3号 1987

註7 出土量から見て、新開3号墳に円筒埴輪があったとは考えがたい。埴輪の一部は新開1・2号墳からの流入も考えられる。



第34図 新開古墳群全体図



第35図 安養寺古墳群全体図



安養寺遺跡全景（西から）



安養寺遺跡全景（新開3・5～7号墳）



振文鏡出土状況



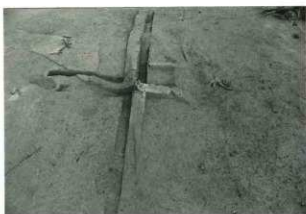
鏡下の木片



振文鏡出土状況



新開3号墳主体部（北から）



主体部完掘状況



鉄斧出土状況



鉄剣出土状況



形象埴輪出土状況



新開3号墳崩落土



新開3号墳盛土土層



新開3号墳崩落土（南西端部）



新開3、5号墳間土層



新開3号墳盛土土層



新開5号墳 全景



新開5号墳 崩落土



新開5号墳 盛土土層



新開6号墳 周溝土層および土器出土状況



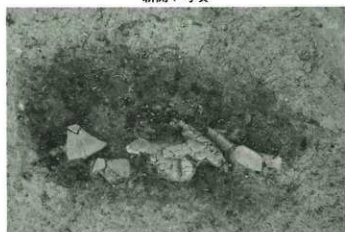
新開6号墳 (西からみる)



新開7号墳



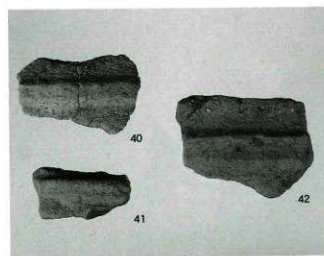
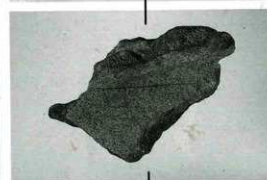
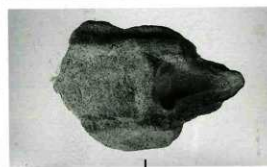
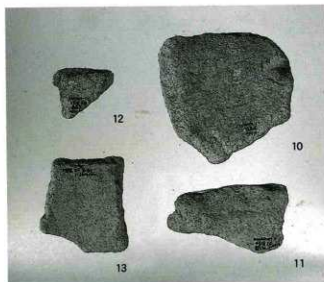
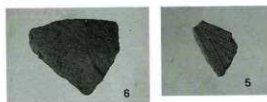
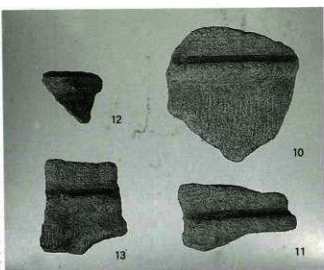
土墳墓断面

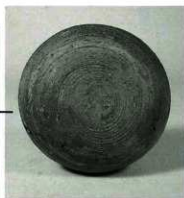


P-1



土墳墓全景







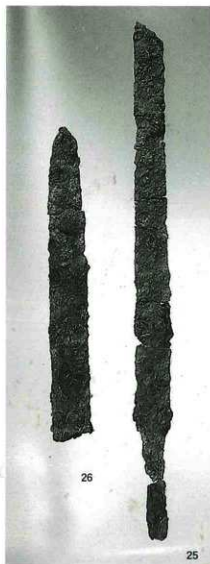
23



24

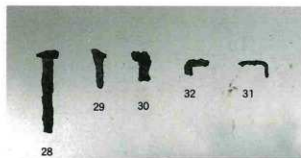


27



26

25



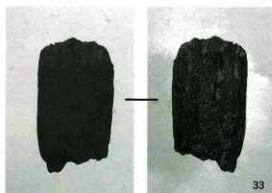
28

29

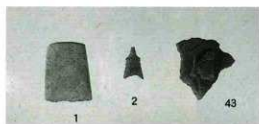
30

32

31



33



1

2

43

報告書抄録

ふりがな	りつとうしまいぞうぶんかざいはくつちょうさ2003ねんど ねんぼう2							
書 名	栗東市埋蔵文化財発掘調査 2003年度 年報Ⅱ							
副 書 名	安養寺遺跡(新聞3・5～7号墳)							
巻 次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編 著 者 名	雨森智美							
編 集 機 関	栗東市教育委員会 財団法人栗東市文化体育振興事業団							
所 在 地	〒520-3011 滋賀県栗東市下戸山47番地 栗東市出土文化財センター内 TEL077-553-3359							
発行年月日	平成17年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
安養寺遺跡	栗東市安養寺5丁目 828・828-1・828-2 ・829	25321	321-066	35° 00′ 47″	135° 59′ 56″	平成15年6月9日～ 平成15年12月19日	1909㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
安養寺遺跡	古墳群 古墳時代	古墳4基、土壇墓1基		振文鏡、鉄剣、小型鉄斧、 鋤・銀刀先、埴輪、須恵器、 土師器、黒色土器、瓦質土器				

栗東市埋蔵文化財発掘調査2003年度 年報Ⅱ
安養寺遺跡（新開3・5～7号墳）

発行日 2005年3月31日

編集・発行 栗東市教育委員会

財団法人栗東市文化体育振興事業団

〒520-3011

滋賀県栗東市下戸山47番地

栗東市出土文化財センター内

TEL 077-553-3359

FAX 077-553-3514

印刷・製本 マルキ印刷株式会社草津営業所